



曾我三ヨシさんの思い出

昭和7(1932)年12月28日生 新潟県佐渡島

昭和53(1978)年8月12日

娘のひとみさんとともに拉致(46歳)

曾我ひとみさん(三ヨシさんの娘)

平成17年5月12、東京連続集会発言から要約

私の母は本当に物静かな働き者でした。私が多分3歳か4歳くらいの時だったと思うんですけども、皇居へ勤労奉仕に行っていました。その時私が小さかったので、「一緒に行きたい」とわんわん泣いたこともありました。生活が貧しかったため、母は昼間は土建業で言うか、ヒューム管や油、セメントなどをいじって本営に大変な仕事をしておりました。夜帰ってきてからは12時くらいまで内職でざるを作っていました。そのざるを作るのも自分の休みの日に一人でリヤカーを引っ張って山に竹を切りに行っていました。懸命私たちを育ててくれました。

母はあまり怒ることがなくて、私たち姉妹に手をあげることほとんどなく、本当に優しい優しい母でした。私たち姉妹には、自分がどんなに苦しくても辛くてもそういう顔を見せずに本当に優しく育ててくれました。

それと私が今手にはめている時計です。男物の時計なんですけど、私にしてみると、この26年間、時計というよりは私の母だと今でも思っています。ちょうどあの日、思い出したくもない日です。母と別れた日に、その日からずっと私の腕にはこの時計があります。10年少し経ったくらいで時計が動かさないようになってしまいました。その後直すことができなかつた時計も、私が日本に帰ってから動くようになりました。だから私はこの時計が直った時に思いましました。絶対に母もこの時計と同じように、どこかで絶対に元気で生きています。

1978年、その日は土曜日でした。私はその頃看護学校に通っていて、毎週土曜日になると家に帰っていました。8月12日なのでお盆の支度をしたり、ちょっと忙しい時でした。夕方、もう7時は回っていませんけど、母と一緒に近所の雑貨屋さんに行き物に出かけました。その頃は街灯



安倍晋三・自民党拉致問題対策本部長に近況報告する曾我ひとみさん。平成17年5月12日

もほとんどなく、道路といってもあまり車も通らない。買い物も済ませて、1週間の話を母としながら二人で歩いていると、何か後ろに人の気配を感じたので、私が後ろを振り向きましました。後ろには三人の男が横並びで付いてきていました。その時、何か気持ち悪いから、二人とも早足になって、少しでも早く家に帰ろうと歩き始めたその時でした。

後ろから、何か静かにぱーっと来たって感じて。そして、道路の横にあった木の下に私と母は引きずり込まれてしまいました。その後はお口、手足を縛られて袋に入れられました。そして船に乗せられ、着いたのが北朝鮮でした。もちろん行った当初はその地名も分かりませんでした。

船の中では母の気配は感じてないんですけど、下手な日本語で話している女性がいました。私に対してじゃないです。私がいいた場所よりもよっと離れた場所に母がいいたと思うんです。小さい船に最初乗せられてしばらく行って、もっと大きな船に移されて、小さい部屋に入れられて、そこで袋から出してもらった。怖かったですね。自分でも何が何だか全然分からないうか、どうなってるんだろう、ただただ怖い。どこに行くんだろう、誰なんだろう、そのことだけを必死に考えました。勉強しに行くんだと、片言の日本語で言われました。そして袋から出された時に、お母さんは佐渡にいる、と。

清津に着いたのが夕方5時くらいでした。日付も付いてる時計だったので、ああもう1日が過ぎてるんだな、と。金日成の肖像画のある招待所に入れられました。「この人知ってるか」と言われたので、「こんな人見たことありません」。中国ですか」と聞きました。「朝鮮だ」と言うので、「そんな国あったんですか」と問いかけると、向こうは半分怒り出したような感じでした。夜行列車で平壤に連れて行かれ、15日の朝6時頃着きました。そこに17日まで一人でいて、18日に横田めぐみさんと一緒になりました。

めぐみさんと2、3か月離れた時期に、母に手紙を書きましたけども、母の許には着いていないと思います。母は佐渡にいたと言われていたので、もう、思ううしかなかつた。日本にいるっていう母も、日本に来て見ればいませんでした。24年間私はその嘘を信じていたということです。結婚してからは子どもたちができたりして、一人でいる時よりは気持ちも少し和らいできました。もう子どももできただから、ここでずっと住むしかないのかな、という気持ちはありません。でもその半面、絶対に帰るかと日本に帰ると信じていました。

最後まで嘘でいるのは隠しきれないっていうか、ごまかしがきかないかなと考えると、子どもたちにも、拉致されてきたことをゆっくりと話しました。そして子どもたちも、子どもたちなりに分かってくれて、今、だからこそ絆が深まったのかなと思っています。だんだん時間が過ぎて、大きくなっていろいろ考えたをすれば、誰が間違っているのかっていうのは、私が言わなくても子どもたちは分かってくれました。



曾我ミヨシさん① 18歳のとき、和裁の勉強のため四日町集落の永井様宅に2年ほど通った当時の仲間と。
真ん中の黒の洋服姿がミヨシさん。昭和23年(1948年)



曾我三ヨシさん② 学校卒業後最初の集落の同級生の集まり。20歳の三ヨシさん(後列左から3人目)。
昭和26年(1951年)



曾我ミヨシさん③ 25歳の時の同級会。ミヨシさんは前列右から4人目。
この写真には夫・茂さんも写っている(後列横向きの男性)。昭和31年(1956年)



曾我ミヨシさん④ 親戚の葉タバコ乾燥の仕事を手伝った時、ひとみさんを膝に抱いて。
昭和36年(1961年)7月上旬、ミヨシさん29歳(前列左端)



曾我ミヨシさん⑤

愛娘・ひとみさんを抱っこして写るミヨシさん。
昭和36年(1961年)7月上旬、親戚の家の前で。



曾我三ヨシさん⑥ 近所の人たちとお宮参り。42歳のミヨシさん(左から3人目)。昭和49年(1974年)3月頃 072 2-60



曾我ミヨシさん⑦ 北越ヒューム管工場に勤めていた時、会社の慰安旅行先のハワイアンセンターの前で記念撮影。後列左端がミヨシさん。昭和49年(1974年)9月